

「 「災害」の二文字は命のサイレン 」

愛媛県 松山市立三津浜中学校 2年 河野 心空

「ピロリロリン、ピロリロリン。」

真夜中に幾度となく鳴る警報音。胸の奥底がざわつく得体の知れない不安。今にも屋根が落ちてきそうな地響きを立てる大きな雨音。

朝になり、両親の慌てた声で目が覚めた。家に隣接する線路が水に浸かり、大通りに面する店舗の一部が床下浸水していた。当時小学1年生だった私は、事の重大さが分からず野次馬のごとく2階の窓から見渡すと、見慣れた風景が一変していた。隣町では、土砂崩れが発生し、家屋の被害まで出ていたことも後に知った。行き来する緊急車両、テレビで見た光景は幼心にも大変ショックを受けた。

「この間遊びに行った公園の近くだ。怖いな。雨だけでこんなに変わっちゃうんだな。」  
この時初めて、災害は人事ではないという命への危機感が生まれた。

この出来事は、西日本豪雨として多くの教訓を残している。

近年、ヒートアイランド現象や線状降水帯の影響からか「集中豪雨」という言葉を日常でよく耳にするようになったと感じる。

令和6年7月、松山城の東斜面でまたしても土砂崩れが発生した。大量の土砂が住宅地に流れこみ、尊い命も奪われた。

この場所は、私の大好きな大叔母が毎朝、ウォーキングをしているコースであり、姉の通学路のすぐ側だったため私はゾットした。

さらに同年11月、「記録的短時間大雨情報」が発表され、「緊急安全確保」までも発令された。この時私は、学校の文化祭の真っ最中だったため、いつもとは桁違いの雨音とは感じてはいたが災害級の大雨だとは知らなかった。

松山市では、松山城での災害を教訓として特に、土砂災害に対する警戒から避難の早期化、情報収集の重要性、防災訓練の実施を進めていたため、迅速な判断や指示出しに繋げることができていた。

土砂災害は、人命や人々の財産を容赦なく奪っていく。天気予報等で事前の予測はされていても、「いつ」「どこで」「どのような規模で」発生するのか分からない。

危険と安全は紙一重であり、人はどれだけ技術が進んでも自然災害をくい止めることは出来ない。いかに防止策を講ずるかが命を守る鍵だと再認識した。そこで、社会科の防災学習で学び、印象に残っていた「三助」を柱として自分なりに考えてみた。

1つ目は、自分の命は自分で守る、家族の命も守る「自助」だ。家族が一緒にいる時に起こるとは限らないのが災害だ。まず家族会議を開き、災害時の連絡手段、合流場所の確認を行い、地域の危険箇所の把握をハザードマップで行った。特に、土砂災害警戒区域の確認や避難場所、避難経路を地図を用いて具体的に見直した。すると、自宅から緊急避難場所まで徒歩5分、最寄りの指定避難場所までは徒歩15分かかることが分かった。

しかし、これは最短ルートを利用した場合の移動時間である。実際、前述の災害時には隣接する線路の遮断機が降りたまま、警告音がなり続き渡れる状況ではなかったので、遠回りを余儀なくされる可能性が高い。また、祖父母と同居しているため、より早めな避難開始が必須だ。

次に、防災非常袋の中身のチェックをした。主に、水と非常食の消費期限の確認やオールシーズン対応の生活必需品の追加を行い、置き場所も全員で共有した。

2つ目は、地域や近隣住民と協力し、互いに助け合う「共助」だ。これまでに地域の防災訓練に参加したことで避難経路の確認や避難方法の実践、応急手当の方法、簡易トイレの作り方を学び、地区の集会所の備蓄品の種類と保管場所も把握しているので、避難時には周りの人に伝達して役立てたい。

令和7年度 「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞（事務次官賞）

それ以前に大切なのは、日頃から近所の人とのコミュニケーションを図り、積極的に挨拶を交わし顔なじみになっておくことだ。避難の際には声をかけ合い、出遅れや置き去りをゼロにするためだ。

3つ目は、行政や公的機関による救助、援助、支援を提供する「公助」だ。私は、松山市の防災アプリをスマートフォンに入れ、最新情報を入手できるようにしている。そのため充電残量をこまめにチェックし備えている。

以上のことから、避難する際にはためらわず、即行動することが命を守る第一歩である。

やはり、大事なことは「自分の身は自分で守る」、「定期的な家族会議の開催」、「近所の人と顔が見える関係を築く」これらのことを常に念頭に置き、少しでも命が助かる可能性が高い行動に移せる糧としたい。

自分は大丈夫、という油断や思い込みを捨て、あの時こうしていればという後悔だけはしないよう、落ち着いた判断能力を培い、一番貴重な『命』を守りたい。